特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ会誌
2011 年 12 月

もくじ

タンチョウ保護研究グループ
10 年プラン委員会　・・・・1

中国東北部の湿原を訪ねて・・・2

俵橋湿原プロジェクト
夏から秋　・・・4

講演会「地域参加型の自然再生と
自然保護のとりくみについて」・・5

活動記録　・・・・・6

タンチョウが台湾へ送られる・・6

タンチョウ保護研究グループ10年プラン委員会

理事長　百瀬邦和

前号でお知らせしたタンチョウ保護研究グループの 10 年プラン委員会が 10 月 15 日と 16 日の 2 日間にわたって開かれました。委員会には理事、監事、運営会員から 14 名が参加し、タンチョウ保護研究グループと北海道のタンチョウについての目標(夢)、当会の 10 年後の姿について、資金調達に向けた活動、調査研究、広報活動、環境保全あるいは再生に関する活動、国際協力、事務局のあり方など多岐に渡って夜遅くまで議論されました。

当会の活動は調査研究を基本としたものであり、それが最大の特徴であるということは改めて確認されました。厳しい経済状況の中での調査費用の捻出が課題ですが、この基本はしっかり守っていきたいと思っています。大陸の仲間達との協力や将来のタンチョウ生息環境保全に向けた活動などにも資金が必要です。現在は助成金など民間助成団体や行政からの資金に頼っているのですが、今後はそれに加えて企業・個人からの寄付や会費など幅広い方面からの資金調達を行なっていくことが必要です。手段の一つとして、免税措置が受けられる認定 NPO 法人化の推進と、同時に求められる、当会の目的と活動をアピールする広報活動が欠かせません。

10 年プラン委員会は来年 5 月の理事会、総会までにプランをまとめることにしています。また、平行して新しい広報活動を計画しています。2020 年にはどんな組織になっているでしょうか。

中国東北部の湿原を訪ねて　百瀬ゆりあ

本年度、タンチョウ保護研究グループが、イオン環境財団の助成をうけて国際ツル財団のリイン・ス博士に調査をお願いしている「中国の希少野生鳥類調査」とス博士の指導のもと今年の春から実行に移されている「学生主導によるタンチョウの保護活動」とに同行し、9月23日から10月6日まで中国の4箇所の国立自然保護区と1箇所の湿原とを訪れました。

訪れたのは内蒙古自治区にあるフイフ、トゥムジ両国立自然保護区と自然保護区の指定はまだ受けていないモリゲール湿原、黒龍江省のザーロン国立自然保護区、また吉林省にありトゥムジ国立自然保護区の下流に位置するモモグ国立自然保護区です。訪問先では局長や副局長をはじめ、職員のみなさんが丁寧に対応をしてくださり、タンチョウの研究・保護に対する熱意が伝わってきました。特にどちらの自然保護区も大学等の研究機関と密接な連繋体制があり、若い研究者が活き活きと活動していらして羨ましく思いました。

フイフ国立自然保護区は1997年に設立され、フイ河沿いに湿地・草地・森林を有し、総面積は346, 848haです。ホロンバイル市に本部があり、保護区内には5箇所のフィールドステーションがあります。本部には事務棟の他に実験棟やゲストハウスがあり、また、各々のフィールドステーションにも宿泊施設があり、学生や研究者が調査のために寝泊まりできるようになっています。

まる1日、雪の為に調査ができませんでしたが、今回の滞在中に、12番い、1成鳥、2家族のヒナ1羽連れ、1家族のヒナ2羽連れ、計35羽のタンチョウを見ました。この2家族のヒナ1羽連れは初めての場所で確認されましたが、ここで繁殖したものではなく、おそらくアルグン川のほうから渡ってきたのであろう、ということです。

この自然保護区では、今春につづき2回目になる「学生主導によるタンチョウの保護活動」がおこなわれました。ハルビンにある東北林業大学の愛鳥クラブが中心となり組織された学生グループが、ス博士の指導のもと、準備から実行まで取組んでおり、今回はそのなかから13名が選ばれて参加しました。活動は大きく二つに分けられます。ひとつは学校訪問で、もう一つは家庭訪問です。学校訪問では学生が自分達で用意をした様々な教材を携えてタンチョウについての講義をしに小・中学校にでかけていきます。また、家庭訪問ではタンチョウの繁殖地のちかくにある村々に行き、まるで地平線に散っているような家々を一件一件訪ね歩き、タンチョウの目撃と卵の違法採取についての情報を集めます。パオに住んでいる村人のなかには、一生涯草原で生活をしていてモンゴル語しか話さない人もいます。都会出身の学生達にとってはいろいろな意味で貴重な体験であることでしょう。

トゥムジ国立自然保護区は1996年に設立され、94, 830haある総面積の30％が湿地で残りは草原です。人口が15, 000人のトゥムジ村のはずれに立派な本部があり、自然保護区内に3箇所のフィールドステーションがあります。この保護区は5箇所ある国家レヴェルの疾病モニタリング・キーステーションのうちのひとつで、また標識調査のステーションでもあります。ここでリングを装着したマナヅルが出水で確認されたそうです。滞在中は本部にある副局長室のスイートを、天井や床やベッドをごま塩を振ったようにうめ尽くしているテントウムシと一緒に、使わせて頂きました。

この自然保護区の目玉はノガンで、夏には300羽、冬には150羽程が生息しています。今回は野生のノガンをみることはできませんでした。ここは、コマホオジロの唯一の繁殖地として知られています

学校訪問による講義（ホロンバイル市）

が、ツルもタンチョウ、マナヅル、アネハヅルの３種が繁殖しており、渡りの時期にはさらにクロヅル、ナベヅル、ソデグロヅルの３種が加わり計６種がみられます。今回も一日の間に、すでに南に渡っていってしまったアネハヅルを除く、５種のツルを60, 000 羽のガンの群れと一緒に見ることができました。今シーズン、タンチョウは４巣が確認されていますが、滞在中は成鳥１羽とヒナ１羽連れの１家族との計４羽しか見ることができませんでした。

モリゲール湿原はホロンバイル市から北に 20km 程に位置し、ハイラル河の支流であるモリゲール川沿いにある湿原です。モリゲールはモンゴル語で「賢い川」という意味だそうです。小さい湿原といわれて行ってみてびっくりしました。なんと、40km × 20km の広さがあります。ここはまだ保護区に指定されていない湿原で、一日も早く自然保護区にされることが望まれています。

今回の調査では、ツルはナベヅル、タンチョウ、クロヅル、マナヅルの４種が確認されましたが、昨年の同時期には数羽しか確認されなかったナベヅルが今迄での最高数の 86 羽の群れで見つかりました。タンチョウは７番い、１成鳥、ヒナ１羽連れの１家族の計 18 羽が見られました。

ザーロン国立自然保護区は 1984 年に設立され、総面積は 210, 000ha ですが、見渡す限りのヨシ原が広がっています。数年前までは水位の低下の影響をうけヨシが衰退していましたが、2009 年から人工的に水位の調節をするようになり、大分回復しました。局長が「ザーロンは光り輝くヨシの大海原です」とおっしゃいましたが、夕陽をうけて輝くさまは、まさに「黄金の大海原」そのものです。

タンチョウは野生に 300 羽いるということで、大陸の繁殖個体群としては最大です。飼育下にも 300 羽いますが、今年は 23 番いから 29 羽が育ちました。２個の卵のうち１卵は親に抱かせ、もう１卵は取り上げて人工孵化します。訪問した時期には、今年育った全部の幼鳥がひとつのケージにいれられていました。このまま来春迄一緒に育てられ、来年一年間は有名な「フライトショー」で飛行訓練をかさねます。その後うまくいけば、放鳥されるということです。今はここ生まれのすべてのタンチョウに自家製の赤いプラスチックリングを装着しています。

ザーロン国立自然保護区で飼育されているタンチョウ

モモグ国立自然保護区は吉林省にありますが、ちょうど吉林省と内蒙古自治区と黒龍江省とが接するところに位置します。1997 年に設立され、総面積は 144, 000ha です。保護区内には博物館も併設されており、秋の観光シーズン真只中ということもあり、ガイド嬢が続々と到着するグループをひきつれて館内を案内していました。

ソデグロヅルの最大の中継地となっており、此の春には 3, 700 羽が確認されましたが、これは今迄での最高記録だそうです。今回も 2,309 羽が確認されました。ここでも人工的に水位をコントロールしており、ソデグロヅルやガン・カモは保護区の中央にある 3, 900ha ほどの浅い水辺に集中しています。今年、春の渡りが終り秋の渡りが始まる迄の短い間に、この 3, 900ha を取り囲むように 36km もの舗装道路がつくられました。バードウォッチングや写真撮影にきた人達の車が引きも切らずに通っています。今回タンチョウは、ここではみられませんでした。

今回訪問したどちらの国立自然保護区も大学等の研究機関との密接な連繋体制があり、学生や若い研究者が活き活きと活動していらして羨ましく思いました。特に、2007 年にタンチョウ保護研究グループが釧路で主催した国際会議にご出席以来 DNA の研究等で当グループと交流がある東北林業大学国際関係学部の学部長、ホンフェイ・ゾウ教授の指導をうけた若手研究者がどちらの保護区でもご活躍で、これからの協同研究にむけて大いなる期待を胸に帰国いたしました。

俵橋湿原プロジェクト　夏から秋

「中標津の自然を知ろう会」と共同作業で進めている俵橋湿原プロジェクトは今年で３年目を迎えました。今年は活動の一部にニトリ北海道応援基金の助成を受けています。

前号でご報告したように、今年は中標津町より借用している土地＝畑に丁寧に畝(うね)をたてて種まきを行ないました。７月下旬に草取りに行った際には、40cm 程に伸びていたものもありましたが、多くはまだ小さなうちにシカに食べられてしまったらしく、畑一面に覆った雑草（主にオオイヌタデ）の中から所々に薄緑の細長い葉が顔を出しているのが見える程度でした。中には葉の半ばから先が鎌で払ったように無くなっている苗もありました。周りの雑草を残っている苗の回りに積んで覆った結果、食害の比較的少ないところでは、なんとか畝状に見える程度に苗が出てきました。

ところが、道東各地のデントコーン畑ではそろそろ穂がで始めて来た８月下旬、TPG の畑では何処にもトウモロコシの葉が見えない状態になっていました。先月雑草から「掘り出し」て見つけ易くなった、まだひ弱で柔らかい葉と茎がまたもシカに食べられたのでしょう。これではタンチョウの餌になるどころかニオを作る材料にもなりません。残念ですが今年も隣の中林農場からニオの材料を分けていただくことになりました。専門家によれば、畑の規模が小さい程シカの食害が激しいとのことで、今後は本格的なシカ対策が必要になってきました。

俵橋湿原では鳥と植物についての調査と記録の整理を始めました。これまでに鳥類 73 種、植物 220 種以上が記録されました。これは、これまでの中標津の自然を知ろう会の活動記録に昨年と今年の調査結果を合わせたもので、特に鳥では初めての霞網による標識調査を行ないました。

また、民間レベルで自然再生の取り組みを進めている海外の事例を紹介していただくための講演会（次ページ参照）にご来釧いただいた、ドイツの G. ノバルト博士とアメリカの S. フリーマン博士に俵橋湿原を実際に見ていただき、同地の湿原環境を再生する活動にあたっての具体的なご指摘をお寄せいただいています。

今年のニオ作り　　工藤静子

10 月 27 日、昨年と同じ放牧地跡地でニオづくりを実施しました。作業は、「中標津の自然を知ろう会」のメンバー３人と釧路からの４人で行いました。

今年６月 19 日に播いたデントコーンはシカの食害で全滅したため、地元の農家からニオ用に刈り取ったトウキビがら 200 本（少し足りませんでしたが）を、またポリバケツ活用の自動給餌器に入れるデントコーンは、道の農業試験場から提供していただきました。作業は１時間ほどで終え、そのあと引き堤の湛水池で野鳥を観察し帰路に着きました。

骨組みにコーンの束を立てかけていきます。

立派なニオができました。

講演会「地域参加型の自然再生と自然保護の取り組みについて」

本年８月 31 日、釧路市内にて、タンチョウ保護研究グループと環境省の主催による講演会「地域参加型の自然再生と自然保護のとりくみについて」を開催し、市民ほか約 40 名の来場がありました。

講師は、ツル情報センター（ドイツ）のギュンター・ノバルト博士とワシントン大学（アメリカ）のスコット・フリーマン博士のお二人にお願いしました。

ノバルト博士は研究者、住民組織、NGO グループなどが、行政の協力を得ながら湿地再生を進めている事例を紹介されました。ドイツは農地開発やピート採取などで湿地が減少しました。湿地を開拓して作られた農地は生産性が低い場所や、放棄されてしまった場所も多くあります。湿地を回復するために、採算性の悪い農地や植林地を購入し、排水路を止めて水位を上げたり、掘り下げて人工池を作るなどして、湿地再生を試みました。また、川を横切る農道を改良したり、排水路を蛇行化したりして、水生生物が生息しやすい環境も作りました。湿原の見通しを確保したり、富栄養化を防止するために樹木の伐採を行なっている例も紹介されました。土地の買い上げなどはＥＵ、ドイツ連邦、州政府などが資金を拠出しています。再生事業はさらに地域社会や自然保護団体なども加わり、一般市民も意見を出しながら進められています。湿地の再生と共にクロヅルの生息数も増加し、ツルが増えた場所には観察場所も作られ、多くの人が訪れるようになりました。また、子どもたちに作業をしてもらうなど、環境教育の場としても活用されています。ドイツは個人所有の庭に生えている枯れた木を伐採するのにも厳しい審査が必要なお国柄なので、湿地回復に取り組む行政の姿勢には感心させられました。

ギュンター・ノバルト博士

スコット・フリーマン博士

フリーマン博士はワシントン州シアトル郊外にあるタルブー川（Tarboo Creek）の自然再生事業を紹介されました。タルブー川は総延長 20km、支流を入れると 60km くらいの小さな川です。ちょうど北海道が開拓された頃と同時期に開拓が始まり、川は直線化され、木が切られて放牧地となりました。しかし酪農には適さず、放棄されました。フリーマン博士のグループはこの土地の一部を買い上げ、川の再蛇行化や川の中に大木を入れたり、砂利を入れたりした水生生物の生息環境の改善、荒廃地への植林などを行い、昔の川の再生を進めています。タルブー川のプロジェクトは①源流から河口までを対象とする。②川だけでなく集水域全体を扱うという二つの点で特徴的です。流域全体で６人の所有者（州政府や NGO も含む）がいて、サケの遡上を目標に、それぞれの場所で自然再生プロジェクトが進められています。このプロジェクトは民間の小さなグループが主導し、20 を超える団体や企業、行政機関、そして個人が参加して進めています。環境教育の場としても利用されており、４つの町、５つの学校から年間 500 人くらいのボランティアが作業しています。お話の中では、博士も家族とともに実際に参加されている作業や、プロジェクトのシンボルであるサケの遡上が始まったこと、事業地一帯に鳥類やほ乳類が増えてきたという成果等についてお話しくださいました。

なお、この講演会は環境省の平成 23 年度国立公園等民間活用特定自然環境保全活動（グリーンワーカー）事業（釧路湿原周辺農地におけるタンチョウを指標とした湿原生態系保全手法の検討事業）の一環で開催したものです。

＜活動記録＞（2011 年 8 月～ 11 月）.

8 月 3 日　会誌「Tancho」13 号発送
8 月 5 日　運営会員連絡会（5 名出席）
8 月 29 日　俵橋湿原の現地視察・勉強会（TPG より 4 名、中標津の自然を知ろう会より 2 名、フリーマン博士、ノバルト博士、大学生 1 名が参加）
8 月 31 日　講演会開催：地域参加型の自然再生と自然保護のとりくみについて（於：釧路市交流プラザさいわい）講演者：G. ノバルト博士（ツル情報センター、ドイツ）、S. フリ―マン博士　（ワシントン大学、アメリカ）
9 月 1 日～ 30 日　展示会「文化の中のツル －タンチョウ－」を開催（於：シルバーシティ石神井南館（東京））
9 月 2 日　運営会員連絡会（7 名出席）
9 月 3 日　わっと (釧路市市民活動センター) 生誕祭にポスター展示：TPG の活動を紹介
9 月 4 日　シルバーシティ石神井南館で講演、タンチョウの現状を紹介
9 月 21 日～ 10 月 9 日　中国東北部での調査と啓蒙活動に参加と北京で国際タンチョウネットワーク会議の打ち合わせ
10 月 1 日　俵橋湿原でニオ設置のためのトウモロコシの刈り取り（TPG より 1 名、中標津の自然を知ろう会より 2 名参加）
10 月 11 日　運営会員連絡会（7 名出席）
10 月 15 日～ 16 日　タンチョウ保護研究グループ 10 年プラン委員会開催（於：シルバーシティときわ台ヒルズ（釧路）、釧路市民活動センター「わっと」）
10 月 21 日～ 22 日　国際ツル財団理事のブラム氏来釧、TPG の活動を紹介する
10 月 27 日　俵橋湿原にニオを設置
11 月 4 日　運営会員連絡会（9 名出席）
11 月 14 日　TKG ニュース 51 号発送

コラム

タンチョウが台湾へ送られる。

9 月 14 日に釧路市動物園から台湾の台北市立動物園に 2 羽のタンチョウが送られました。今まで、日本国内に生息するタンチョウが国外に輸出されることはありませんでした（あまり知られていませんが、本州の動物園で見られるタンチョウもほとんどは中国から輸入されたものです）。北海道のタンチョウは保護の観点から、国外移動を制限していたのです。今回、台湾政府からの強い働きかけもあり、初の国外移動となりました。これが実現したのは、長年、タンチョウの飼育下繁殖に尽力し、飼育数を増やしてきた釧路市動物園の成果のおかげでもあります。

10 月 30 日には一般公開セレモニーも行われ、台湾国中の関心を集めました。タンチョウをきっかけに台湾との交流が深まる事が期待されます。

＜会員（11 月末現在）＞
・運営会員：25 名、個人サポート会員：134 名、団体会員：12 団体

Tancho Protection Group (TPG) newsletter　TANCHO
Fourteenth issue　December 2011

＜表紙写真＞
ソデグロヅルが休息するモモグ国立自然保護区
（2011 年 10 月 5 日　百瀬ゆりあ氏撮影）

特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ
（編集：松本文雄）
〒 085-0036
北海道釧路市若竹町 10 番 2 号
Tel/Fax 0154-22-1993
e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp
URL: http://www6.marimo.or.jp/tancho1213